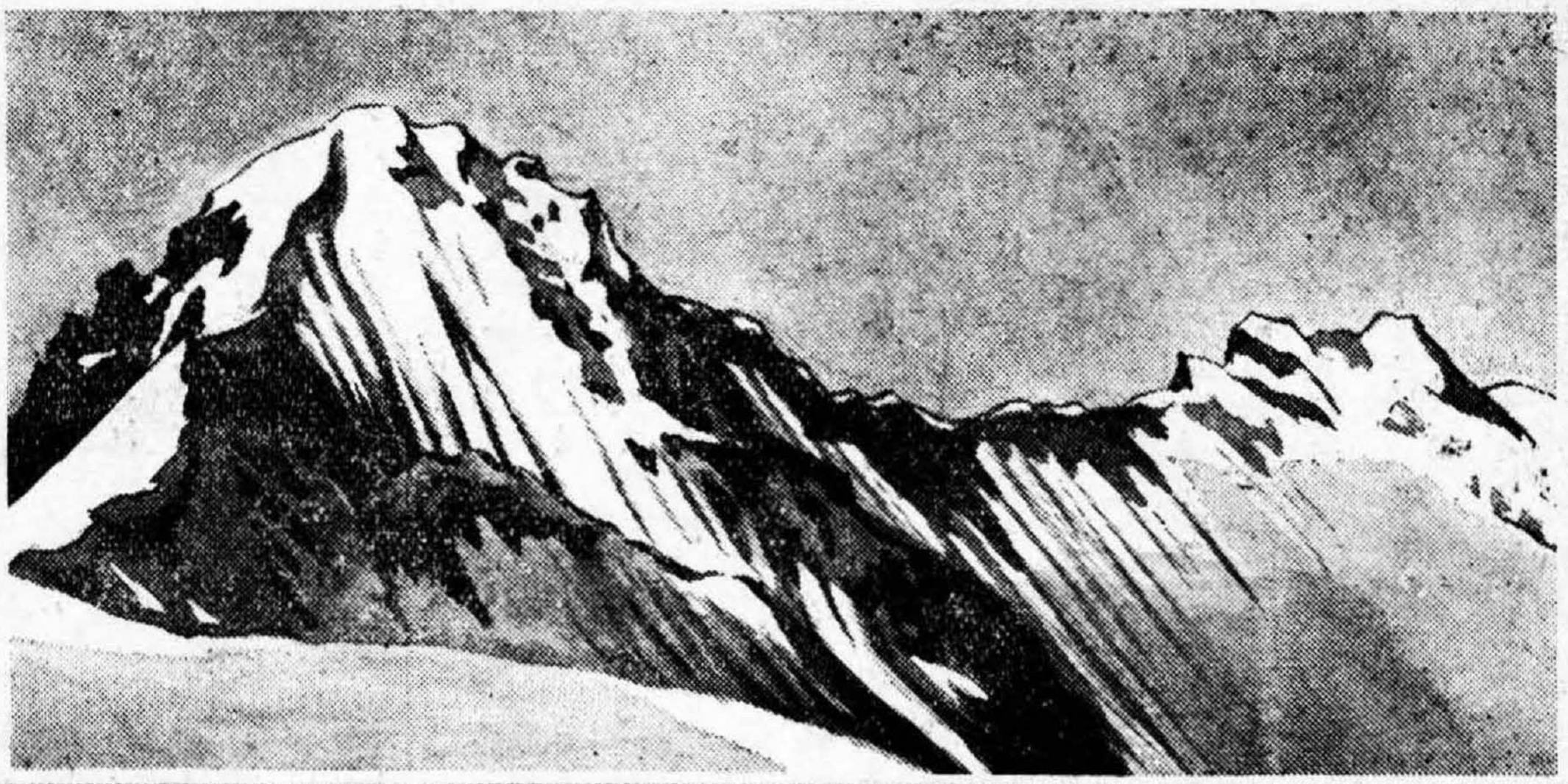

針葉樹會報

通卷第九十六號

今年になつて登つた山

近藤

隨分永い題ではあるが中味は餘りない。今年になつて九回になるが、伯者の大山スキー行は山へは登らなかつたので除外して、八回毎月一回平均總標高を計算すると既に一萬三百餘米登つた事になる。

此の高さはエベレストより一五〇〇餘米ばかり高い。と云つても斷つて置くが、只數字を並べて見た丈で別段「大した登山をしたからどんなもんだい」とタンカを切つて居るのではないから周章てゝ奮慨しないで貰ひ度い。

茲迄書いて來た處、生來の正直者である小生故更に一筆つけ加えざるを得ない。

實は、先程の總標高は公稱で、此内自動車や汽車で登つたのが三、七〇〇餘米、結局本當に足の御厄介になつたのが六、五八九米突になる、と云ふ理である。

そうすると世界最高峯より二、二五一米突ばかり足りない、と云ふ實にたわいもない話。

然し俺は生れてから一體どれ位足の力で山へ登つたのだらうと云ふ事になると頗る興味ある問題の樣に思ふ。

會員諸兄の内にはこんな計算をやつて見る程暇のある方はないでせうが、小生も年をとつて會社を退いたら一度どれ位登つたか調べて見樣と思つて居る。

熊さんなんか恐らく何十萬米突と云ふ事になりやしないかなあ。ホホー、そんなに登つたかなあ、と云ふ丈の面白味であるが一寸調べて見度いものだ。誰かそんな事を考へた人ありませんか。あつたら會報上で知らせ

て下さい。

九州の山の良さ、それは靜かな事である。人臭くない事である。其他は餘り特に感じた事はないが、然し最近は九州の山にも段々親みが出來て、仲間がない時には一人で登つたりする位になつた。東京から轉勤して來た三年前には少しも登り度くなくて、全くどの山も赤の他人の樣な氣がして親しめなかつたのが、三年半の今日矢張り登らずに居れなくなつた自分の氣持の變化に驚いて居る。俺と云ふ男は結局、是れは死ぬ迄登らずに居られない男だと云ふ事は、最近つくづく感じて居る。

何んだかんだ云つても矢張り暫くすると登りに出掛けて行く我身をむしろあきれて居る位だ。よくもこんなに病みついたものだ。

今さなると學校を出てから登つた山の方が遙かに多い。まあ折角體を錬えて置いて會社でも退いた其の時は、ぺんちやん等と一緒にヒマラヤの入口丈でも行つて見る事が出來たらもう此の世に思ひ殘す事はない。

自分の此の目でしつかりヒマラヤの連峰を見て、特に出來ればエベレストを出來る丈近く眺めて、此の世に別れ度い。隨分しめつぱい事になつてしまつたが、是れが小生の一生の願望だ。それで遂々愚にもつかぬ數字を並べて、エベレストに比較して見たりなんかして居る、てな理である。

寶川板幽澤での出來事

神主

クマさんの推奬のもとに、寶川から笠に登つて土合に拔けるコースを選びPEN氏と久し振りに山行の機會を得たところ、とんでもない經驗を味はされて見事に擊退された珍談を書くことにします。

九月二十七日土曜の夜の寶川温泉露天風呂の中で、PEN氏と二人で安曇節を小聲に唄つてゐた時には、半かけのお月樣は出てゐるし、お星樣は輝いてゐるし、寶川の川瀨は二人の背にした石の端を洗つてゐるし、おまけに少々のアルコール分は身體に入つてゐると言ふ譯で、どうやら滿足した二人は湯氣の立ち上る水面に水瓜の樣な頭をフラ〳〵浮かせ乍ら、好い氣持になつてゐた。幽かに明るい湯の底にPEN氏の體が淡い格好をして横たはり、まるで無性物の樣な感じを與えてゐる。東京に近い奥利根の溪に、こんな靜かな夜もあるのかと思つたら、笠ケ岳や至佛が益々愛すべき山に感じられた。

翌朝は曇天で川の音は相變らずに響いてゐる。宿を出たのが七時半、寶川左岸に沿つた軌道をポコ〳〵歩いてトンネルを拔け、紅葉がかつた枝尾根を眺め乍ら國有林に入れば、しばらくして寶川治水試驗事業所に着く（八時半）。溪谷の感じは中々佳い。岩魚は棲んでゐそうだし、水量も豊富だ。一寸川端下あたりの感じがある。こゝから約十分も行くと軌道は對岸に渡つて盡き、道は軌道と別れて依然左岸を辿つてゐる。川の相貌漸く變化して急流となり、登路やゝ高廻りとなつて山路の相を呈した。昨日横山へ來る途中PEN氏と語つた件即ち山男は同時に釣りの樂しみを享樂出來るかと言ふ話しが思ひ出される。魚は居さうな谷だが、釣つたまゝ頂上に行ける譯でなし、山越え峠越えの時間に制限のある

身では、やはり釣りに一日をつぶすのは勿體ない。似た樣で似ないのが山男と釣師だ、別に釣りを學ぶにも及ばないねと言ふ結論になつてしまふ。

程なく板幽澤の出合だ（九時）。少々高捲きして二本橋を渡る。兩岸は相當に迫つてゐる上に、空は相變らず曇つてゐて雲は低い。それに針葉樹と濶葉樹とが交叉し初めて、どうやらあたりは暗くなつた。徑は一寸急だが本流左岸依りに尾根を横切つてゐるらしい。小々平坦なところに出る。PEN氏が先で僕が後だ。すると眞先に居たPEN氏は、不審さうに立止つて先方を見つめてゐる。後から行く僕の鼻柱がペンちやんの脊中に突當りそうになつたとたん、彼氏の左腕は後に伸びて、僕を無言のまゝ押止めた。

オヤどうしたことかと思つた瞬間彼氏の頭は後を振向いて、「クマだ」と一言低い聲を洩らす。さては出たかと肩ごしに先方を眺めれば、居る〳〵。兒熊が二匹に親熊一匹、合せて三匹と言ふ代物が、むつくり肥えた黑い體を十間先の徑端に現して何か喰べてゐると言ふ始末だ。こつちの二人を未だ氣付かない樣樣だが、時は九月で四つ足の發情期、然も獵師も恐れる兒連れの熊だ、あ奴が氣付いたら事だぞと思つた瞬間に、脚のあたりがブル〳〵と震え出した。震えはどうして止まればこそ、お腹の中心を搗つたまゝ、肺腑を通つて頭の先から上の方に拔け去つてしまふ。身の毛もよだつとは正にこのこと、さたんに脚もさは宙に浮んで體はあつさり廻れ右、卅六計を極め込んでゐる。七八間は宙を飛んだと言ふ狀態で、重いも辛いも唯夢中だ。ペンちやんは僕の逃げたのに誘はれて思はず五六間逃げてから、後振向いてワア〳〵と聲を立てる。二人立止つて追手は來るかと樣樣を見れば、どうやら來そうにもない樣子なのでホット一息。ペンちやんは急に笑ひ出すが、さりとて僕は頰のあたりゾク〳〵して、何とも言へぬ恐しさだ。とに角板幽澤迄引返せと言ふ譯で、再び二本橋を渡つてから腰を下して水筒の水を飲み込む。

あゝ驚いたれ、もの五六間も近づいてゐたら大變なことだと言ひ合した時、何とも言えないくすぐつたさに思はず笑つてしまつたが、さて笠には登り度しあすこに出るのも心細い。第一あ奴がどうしてゐるのか判らないのが氣にかゝる。「行こか戻ろか別府の山へ、こゝが思案の眼鏡橋」と言ふ歌があるが、行こか戻らうか笠から土合、こゝが思案の板幽澤と言ふ案配で、三十分ばかり考えてゐる。何しろ兒連の熊だから相手が惡い。廣河原も近く、笠への登路はもう直ぐだが、一旦刺戟したオヤヂに出られては大變だ、歸ることにしようと一決する。ペンちやんの話では、最初先方に黑いものがあると氣が付いたのが始りで、次には黑いものが居ると判つて注目すれば、どうしてもオヤヂだと判決を下す外答えが無くなり、熊だと一言僕に告げた譯だと言ふ。まさかオヤヂだとは思はなかつたねと述懷する。

治水試驗所の近く迄來た時、鎌を持つた二人の男に出合つたので、熊が出たと告げると何處だと言ふ。板幽澤の先だと答へると、へーとさぼけた顏をし乍ら、今は惡い時間だしそれに今年はこのあたりよく出る樣だよ、この間も二人の草刈男が出會して一人は掌で敲かれたと說明して、板幽澤の方を眺めてゐる。今年は

天氣が惡かつたから奥に木の實が無くて、こゝらあたり迄椎の實でも喰ひに來るのだらうが、それでも御無事で結構だつたれと薄笑ひしてる。やつぱり戻つた方が良さそうだ。

寶川温泉に下つて横山に出る。バスに乘つて奥利根の山々を見返した時、あの中にはオヤヂが一杯つまつてゐる樣な氣がして、恐い樣なも一度近くで見たい樣な妙な氣がしてならなかつた。

（一六・一〇・六）

近ちやんと會計

堀岡

文化映畫の題の樣な一文を何故に書くかと言ふと、久し振りの近ちやんの上京を機會に針葉樹會の會計係を小生が拜命したからである。

近頃の酒不足でおみきの上りが惡いのか神主君から酒飲む會をやらぬのは怪しからんと、幹事が叱られてゐた矢先、久々にて近ちやんが上京して來たので之を機會に早速一夕を設ける事にした。當夜は孫さん持參のアルコール瓶に入つた何とかいふお酒、雲ちやん持參の十二年ウイスキーで、會場の酒がちつとも賣れないといふ、昨今では一寸考へられない樣な光景で、當日不幸缺席の神主君には全くお氣毒でした。

扨手相から談たま〳〵針葉樹會の會計に及ぶや「どれ〳〵一寸見せて吳れ」と望月會計氏から名簿を受取るや、「やあこれあいけねい、〇〇が二年分××が一年分、なんだベンちやんも溜つてるぞ。」といふ工合で往年の苛斂誅求振りも斯くやと思はるゝばかり、忽ちその場でかためて取り上げるといふ工合で、小生は傍からうまいもんだと感心して眺めてゐると、何時の間にやら望月名幹事の負擔を輕くする爲會報は林集會は小谷部會計は小生と各分擔を決められてしまつた。斷つたつて、聞き入れられる譯でもなし、結局引受けた事になつたんで、往年の名會計近ちやんに早速苛斂誅求の秘訣を聞くと曰く、「會員の顏を見たら何はさて置き先づ此の人の會費はどうなつてゐるかと名簿を見る事」と傳授して吳れた。在京會員は之で良いとしても、地方會員はそういふ譯に行かぬ。小生も永年地方に居つて『氣にかゝりつゝも送金の面倒』だといふ事を知つてゐるので何か良い方法と思つてゐると、今度學生の山岳部の方に振替貯金口座が出來たので之を利用する事にして、地方在住の未納の方にはこちらから用紙に全部記入の上送る事にしましたから今度こそお忘れなく送金の程此の會報上からお願ひして置きます。勿論この振替用紙がお手許に行かぬ中にそちらからどん〳〵小生宛お送り願へばこれに越した事はありません。會の健全なる發展の爲め、せい〳〵近ちやんから傳授の通りやる積りですから宜敷御協力願ひます。

松木謙三君より戰地便り

（七月十六日附）

本日留守宅より針葉樹會報第九十四號受取りました。作戰の前後のどた〳〵や何かの時に受取つたり受取らなかつたりで、久し振りに見る樣な氣がしました。近チャンの針葉樹會員のことどもを讀んで埃つぽい工場街で友の訪れるを首を長くしてゐる樣子を想像しました。折角の君迄東へ下つてさぞ淋しからうて。

君のテンポシュブングの題を見てこんなしかめつらしいのでは

一寸手が出ぬと思つたら、何だか千家の棚卸しみたいだね。相變らずの元氣、氣焔萬丈だね。筆の枯れたペンちやんの記事がないのが殘念です。孫さんのスキー日記には驚いた。お偉くなられて忙しい〳〵と云つて居られるそうだが、スキーの方も大したもんですね。五色山の降りは師匠に折紙をいたゞいたとあるから熊さんなどより達者になられた譯ですか。

何より皆様相も變らず元氣で何よりです。扨此方は表記の如くに有之、先般の中原作戰に參加して目下一息入れて居ます。未だ〳〵何處にも敵は居ります。出て行きさへすれば敵にぶつかります。內地の山は良かつたが、敵の居る山は餘り感心したものではありません。二、〇〇〇米級の山で霧でもかつゝた時はよい眺めだなどゝ思つて居ると、向ふのコブからバン〳〵とやつて來ます。ロッククライミングはよいが、鐵砲置いては手で登り、やつと頂上に着いた頃には泥で銃が使ひものにならん。待つてましたと擊たれることもある。此の山は丁度燒岳が泥土質と思へば間違ひない樣な赤肌の山です。

此處は水がにがくて薪のないのが困ります。又何處へ行つても小麥、玉蜀黍、高粱、粟で一寸日本向ではありません。私の宿舍から一里ばかりの先には、高さ五百米位の山が列つてゐますが、全く殺風景の山でしたが、雨期に入りましたら少し青味を帶びて來て、夕方などはうつとり眺められる樣になりました。今の樣にのんびりしてゐると始めて山の美しさが味へます。やつぱり山は道樂ですね。

此の邊の戰爭には針葉樹會の皆さんが來られたら好適と思ひます。御前會議の結果針葉樹會員にも異變はありませんか。一度は大陸を踏んで見られるんではないですか。

今雨期ですので蚊の居らぬ夏を味へます。冬はかないませんね。

（堀岡宛）

望月達夫君より戰地便り

（九月十八日附）

先日は御手紙有難う。貴兄の御便りと前後してクマ、ペン、アラ、神主の諸氏より御葉書を貰ひ感謝してをります。今年の夏はO・B軍大いに御活躍の由諸氏の便りで相知り、美ましいことはこの上ないですが、針葉樹會健全なりと大いに喜んでゐる次第です。この所學生現役軍些か顏負けではないかと思つてゐます、クマさんペンチャン等の大先輩が相變らず御活躍のことは若い學生連中のいゝ御手本だと思つてゐます。

時節柄無理かさも思ひますが、一つ凡兒を大いに督勵して、針葉樹會報の夏山特輯號でも出して、笠谷や双六谷、劔岳や白馬方面の記事を滿載してくれませんか。遠く離れてゐる吾々はそれを大いに望んでゐますよ。

故友田君の追悼碑も無事出來上つた由喜んでをります。現役諸氏の努力を多とせねばなりません。吳々も山田、根本等に宜敷云つて下さい。

鷹野の追悼錄の件全く一仕事に違ひありませんが、堀岡氏增山氏等の助力を得て立派なものを作つてくれませんか。是非たのみます。急いで變なものを作るより少しくおくれても何年たつても懷しく繙けるやうなものを作つて下さい。

次に最近の登山界の狀況御通知被下れて有難う。實は岳聯の改組問題等多少新聞で知りました。岳聯の方向等に關しては小生も相當に意見がないことはありませんが、今自分では何とも實行力がないので岳聯に對しての下手な批評な致しますまい。

たゞ登山界にも純粹な登山が次第に國策に添はないものゝ如くに取扱はれ似非登山が横行してゐるのは慨歎に堪えません。登山ならざるものが登山として見做されるやうになつては將來の爲にも面白くないので、この點は日本山岳會邊りでどうしても力を入れなくてはならないことゝ考へてゐます。然し現在の小生は到底その餘暇のないことを御賢察願ひ、且貴兄等こそ十人分百人分の力を以て御活躍ねがひたく存じます。只今表記の處に居ります。日毎秀麗な日高山脈を望見して限りない憧憬の情をよせてゐます。

茅室岳、ベテガリ岳、札内岳、ポロシリ岳等が一望の中に見られ、美生川や戸蔦別川の谷がその間に深く食ひ込まれてゐます。岳に雪が來れば今よりももつと美しい景觀が望まれると思つて今からたのしみにしてゐます。

山岳部も今冬邊り隨分種々な困難があることゝ思ひますが、與へられた範圍内で充分アルピニズムの正道を歩む樣宜しく御指導の程ねがひます。

六日の夜國立の部屋では盛大なお月見が催された由、あの部室のことをいろ〳〵と憶ひ出してなつかしく思つてゐます。武藏野にも秋がきて秩父や道志の山々がはつきり見えてくる季節、富士に初雪の來るのももうじきですね。針葉樹會の諸氏、山岳部の諸兄へは貴兄より吳々も宣敷御鳳聲下さい。

又御便りねがひます。

北海道帶廣市北部第三八九七部隊　（小谷部宛）

故友田君追悼事業報告

根本　大

言葉なくうなだれ、濁りに濁れる常願寺川を、眞白き御靈を守りつゝ下りしは何時、早や一年有餘の思ひを顧みるに至つた。夢現に振舞ひしあのアクシデントのショックは、未だ世を知らざる私達學生の身にとつては、餘りに大きく痛烈なものであつた。よしや技術的に難じられる所少きものにしろあれ死となりて襲ひ來りし現實は、凡ゆる介在物を貫き端的に私達に迫つて來たのである。それかあらぬか、慘めにも取亂した私達の姿は、一方多くの批難と正當なる批判を受くるに至つた。事實受くるに相應しき至らざる私達であつた。秋となり、冬となり、空ろな部室に溜らせる私達を友田君の寫眞は默して視つめてゐた。

もとよりこうした惱みを、そして如何に友の死を生かしとつたかは、部員一人々々の心構への問題であり、敢へて紙上を汚すべきにはあられども、一方私達の間に何か一つの形に自分等の氣持を表してみたい氣持が湧いて來たのである。

此れが追悼碑であり追悼錄であつた。十月、十一月と集まれば口にしてゐた此の二つの事業が、漸く緒についたのは先づ追悼錄の二月であつた。責任者山田を中心に燃へないストーブを取圍みつつ手紙のやりとりを、そして遲れて四月、根本を責任者として追悼碑の計畫が開始された。先づ問題になつたのは資金の募集で

あつた。だがこれとても、先輩の厚い御支援と、一橋同人諸兄の賛助とにより無事解決する事が出來た。そして凡ゆる部員の活動が此の二つの事業を中心に燃へ上つて行つた。今その頃の部誌の二、三を顧みてみれば、

「本日の議題は友田君記念追悼事業學内一般寄附の件、今月二十五日附の一橋新聞に記事掲載の豫定。……石屋に行つて來る。孫さんの紹介がきいたのか、なかなか親切に教へて來れた。……昨日丸ノ内から室町附近を駈け廻つて學校に來られなかつた。友田製藥にて諏訪氏と種々相談して來る。……學校に友田氏から題字を送つて來た。因みに題字は、友田君御父君寺の住職に選擇して貰ひ練習して書き上げた由、親心を偲び給へ！」と。

然し一方三月と共に始まつた學内新體制は、此れに交錯して私達をしてまず〳〵混亂の一路に追ひやつたのではあるが、幸ひに追悼錄は望月さんの懇篤なる御指導により、漸く五月には印刷所に廻せる段取りになつた。八ポ、九ポの符號は馬鹿の一つ覺への譬に洩れず、その頃の得意な言葉でもあつた。然し追悼碑の方は、中川さんの御指導にも拘らず、送れども來らぬ梨の飛礫然たる富山の石屋に安閑としてゐた呑氣な觀面に、危く一週忌には間に合ひそうもなくなつた。急立てられるようにしてNが東京を發つたのは、六月の中ば過ぎであつた。友田氏の御好意による御紹介を唯一の頼りに、富山の石屋を說き伏せ、幸ひに强行せしめる事が出來たものの、當時は八月、九月建立と云ふ事を眞面目に考へられたのである。七月に入り中川さんの御紹介で、數人連だつて濱町の淺野セメントにセメントテクニックを教はりに行つた。

追悼錄も一週忌には友田家に御渡し出來るようになつた。かくして上野を九人の追悼碑建設隊が發つたのは七月九日の晩であつた。

例年にない惡天候にぶつかり意の如くならざるを恨みつゝも、どうにかこうにか十七日、直徑一尺二寸の圓球たる追悼碑を土臺の上にしつかと乘つける事が出來た。入山以來初めての上天氣、惜しみなく晴れ渡つた一週忌十八日の五色ヶ原の一隅に、友田家代表二名、常盤部長を始め部員二十五名參列の下に、無事除幕式を擧行する事が出來た。殆ど眞東に針木岳に向ひ、七月の太陽に磨ける玉の如く光れる花崗石の追悼碑を見た時、過ぎにし一年の懸案が曲りなりにも出來たかと思ふと、私達はたゞ無性に嬉しくなるのを禁じ得なかつた。

不慣れな私達を良くぞこゝまで御導き下りました事を、そしてその厚き御援助と御鞭撻とを更めて針葉樹會諸先輩に深く御禮申上げます。

附記　追悼碑は鷲岳北麓に位置し、縱走路よりは餘り良く判りません。御出での節は五色小屋にて御尋ね下さい。

記錄

美ケ原より和田峠（十月十八日、十九日）　小柳　二郎

風邪を引いて三四日休んだ後丈に書き入れの三日續きのお休みにも大した處へも行けまいと、最初の一日をゆつくり休養して、神嘗祭の夜行で出掛けたのが幸ひにして、汽車の混雜も思つた程

ではなかつた。松本から乘つたバスが入山邊に着く頃から降り出した雨はとうとう本ぶりになつたが、村の雜貨屋で七十錢奮發した番傘が大いに物を言ひ、ビショ濡れの連中を尻目にかけて悠々お晝前に三城(サンジロ)の牧場に着き、其の日は美ケ原ホテルで、景氣よく燃えるストーヴを圍んで栗を燒いたり、炬燵にもぐり込んで放牧の牛馬の話しやら、兎や猿を擊つた話し等に耳を傾けなどして過した。

明くれば十九日、昨日終日降り續いた雨に洗はれて空は飽く迄澄んで底知れぬ碧さを湛え、待望の三百六十度の大展望を約束して吳れる。霜柱を踏んで牧場を通り抜け、小澤を涉つて百曲りの急坂にかゝると、一歩毎に木曾駒、御嶽、槍、穗高の連嶺が頭を擡げて來る。美ケ原の一角に登り着くと、いきなり氷る樣な風に吹きつけられ、眺望もそこ〳〵に原を横切つて茶臼山へ向ふ。昨日の雨は註文通り御嶽、北アルプスを銀白に染めて輝く中に、槍の穗先だけが黑々と空を突き、又蓼科から八つへ續く山波の右には六合目位から上を眞白に粧つた富士が逆光の中に美しい姿を見せ、北の方淺間の煙も鮮かに望まれる。茶臼から扉峠迄、ぐんと標高を低めてカヤトと薄の小徑をたどつて、再びぐつと登りいた三峯山の頂きも又、展望には申分のない所。茲から和田峠までの一時間の尾根歩きは木曾駒、白根、仙丈、八つを眞正面に仰ぐ優秀な展望コースだ。下り算いた中仙道の茶屋、東餅屋では昔に變らず搗き立てのアンコの餅を賣つて居た。

越百から空木へ 八月二日(土) 小柳二郎外三人

伊那電飯島驛(午前六、四六—八、〇〇)=ヤケガレ(八、四〇)—日向小屋跡(九、五〇)—オンボロ澤出合(一〇、一〇)—中小川出合(一〇、四五—午後〇、一〇)—相生瀧(二、〇〇—二、二〇)飛龍瀧(三、三〇)—シラサギ澤出合(三、四〇—四、〇〇)—越百小屋(五、一〇)

前夜新宿で乘込んだ夥しい登山者の內、辰野で伊那電鐵に乘換へたのはほんの二三組位。おかげでまる二日間、山では人っ子一人にも遭はず。

八月三日(日) 小舍發(七、〇〇)— 越百山(午前七、四〇—八、〇〇)—仙崖嶺(八、五〇—九、三〇)—ケサ澤ノツメ(一〇、〇〇)—南駒岳南峯(一〇、三五)—南駒頂上(一〇、五五—午後〇、〇〇)—空木岳(一、五〇—二、二〇)—空木小屋(二、四〇—四、〇〇)—大地嶽ノ頭(四、五〇)—池山小屋(六、二〇—六、五〇)—光前寺(八、三〇)—赤穗驛(九、三五—一〇、〇〇)=辰野(一〇、五五—一一、〇五)=歸京

途中誰にも會はず靜かな山旅でした。中小川の登路は比較的新しいもので決して一般的とは云へないが、小屋は淸潔で氣分滿點といつた所。二、五〇〇米の高所でドラム罐の風呂に入れたのは儲けものでした。

二日目の尾根歩きは朝の中、南アルプスの連嶺が實に立派でしたが、段々ガスが出たので北アルプス方面は駄目でした。仙崖、南駒、空木、それ〴〵特徴を持つた良い山です。空木小屋から赤穗への下降路は、三年前通つた時に比べて大分荒れてゐる樣な氣がしました。

山岳部報告

○ニセコ、チセイヲヌプリ(三、三一—四、三) 林他三名
猛快晴、猛滑走、猛絶景に氣を良くする。
○川乘山(四、二一) 前田他二名
○赤岳、硫黄岳(四、二六—二八) 前田、細野
餘り雪なく、惠まれた山行であった。
○北岳(四、二四—五、一) 佐野、清水、古澤、柳澤
釣屋根にビヴアーク。雪の頂を踏む。
○大菩薩峠(五、一一) 樫淵、森、他第二班員
○九鬼山(五、一一) 山田、他第二班員
○穂高、槍、明神東稜(五、一四—二五) 山田、森、前田
西穂にビヴアーク、穂高槍逆縱走を計畫せるも、天候惡化したるにより中止、後槍より北穂縱走、森、前田歸京、山田德澤生活、明神東稜を登る。
○三ツ峠(五、二四) 根本、樫淵、林、他第二班員
○甲斐駒、仙丈岳(五、二一—二六) 佐藤、他一名
○穂高小屋(五、二八—六、二) 松下、小林、原田、林戸、間々田、伯耆、關根、中林、樋口、外二名
豫科のみで行く。奥穂高登頂。
○奥又白より穂高小屋(五、三〇—六、五) 根本、林、穂高にて小林、原田と合流、瀧谷第三尾根、ジャンダルム等に行く。小林、原田歸京。其後クラック尾根を目ずるも、林、手を擦り剝く。自重して德澤にのぼる。
○鹿島槍東尾根(六、五—一一) 佐野、古澤、入澤
雪少く、天氣に惠まれ快適な登攀であつた。唐松まで行く。
○白馬岳(六、五—九) 樫淵、小泉、川村
白馬頂上にて一人當り蒲團十枚。無人小屋の有難さを滿喫す。
○劔岳(六、一一—一七) 森、他一名
室堂より劍澤小舍、八ツ峰第六峰まで行く。歸り追分までゾンメルを樂しむ。
○乾德山(六、二二) 山田、久保、小林、原田、林戸、中林

故友田純一君追悼記念事業會計報告

收入之部	
豫科報國團總務部寄附	七〇、〇〇〇
學部 〃	一〇〇、〇〇〇
專門部 〃	三〇、〇〇〇
教職員寄附	一八、〇〇〇
針葉樹會寄附	一五一、〇〇〇
豫科生個人寄附	一六三、〇〇〇
學部生 〃	七二、六〇〇
一橋山岳部	三〇、〇〇〇
合計	六三四、六〇〇
支出之部	
追悼錄事業	一七三、三〇〇
(印刷代、一六二、五〇 郵送代 一〇、八〇〇)	
追悼碑事業	四二八、八五〇

（石碑一〇五、〇〇　富山下檢分出張費　二九、八五　天幕送料
三、八〇　セメント代金　一、六〇　運搬人夫賃　七〇、〇〇
五色小舍建設隊宿泊費補助　一三八、〇〇　同食糧　四〇、五〇
謝禮茶代　三五、〇〇　雜費　五、一〇）　二一、四五
其ノ他諸經費
（香華料　〇、五〇　通信費　五、八三　集會費　七、五〇　交通費
六、〇〇　雜費　一、六二）　六二三、六〇
計　一一、〇〇
剩餘金（一橋山岳部會計ニ繰込ム）　六三四、六〇
合計　久保孝一郎

追悼記念事業會計係

針葉樹會月見ノ會　九月六日　於國立部室

出席者（會員）　村尾、高見、增山、鈴木、堀岡、小柳、小谷部、小林、岩崎、大塚（部員）　常盤部長、宮城、山田、久保、森小林、高野、原田、佐野、清水、細野、入澤、大崎、長沼

月見の宴に月を見ずになり勝ちな常例月見の宴でも此の日は特別に晴れ渡つた青空にポツカリと生れた許りの大きなお月樣が松林のすぐ上に笑つてゐた。久し振りの國立の夜、懷しい部室へのあの草徑、過ぎ去つた思ひ出が色々と甦つて來る。青春の純な山の想ひ出を抱いて集り寄つた顏々々がやがて磯野、堀岡兩君等のお骨折りによる酒とビールで綻び、學生諸君の手廻しのよいサービスでスキ燒がヂユウ〳〵賑かに鳴り出した。此の間の例會で盛に月見の會を主張した孫サン御大、急に公用で來られなかつたが、酒と云へば全く目のない重吉君が勢ひ込んで飲みに現れたお蔭で、お酒の配給は七分目止りと云ふ所。

その中に常盤部長も一枚加つて話は深刻な時局談に移行。「……實はこれは秘密だがね……。」等々山岳部も何時か情報部に早變りの態。現役の隱シ藝が一向出ないのはどうした事か。尤も「酒が足られえや」では、當節、策の施し樣もないが。

かくて夜も愈々更けて〝看板〟もとうに過ぎたので、終電車を心配し乍ら歸途につく。此の頃の先輩方仲々御上品で誰も此處へ泊らうと仰せられない。來年の今月今夜たとへ世の中がどうなつても、又此の名月に變らぬメンバーで――諸君盛大に集らうではありませんか。

針葉樹會定例集會　十月八日（水）　於如水會館

出席者（會員）　村尾、吉澤（松）、手塚、增山、鈴木、堀岡、岡田、小柳、林、柿原、小谷部、森脇（部員）　佐野、河村、清水

岡田謙三君關西より東京本社へ榮轉せらる。此の日、懸案の名簿漸く出來上り會員へ配布す。お月見の會の話。これからの山行きの相談で賑ふ。

消息

高見　要君　前號に帝國滿俺株式會社へ移らると記載しましたが高橋要二君の誤りに付訂正します。

高橋　要二君　帝國滿俺株式會社へ移らる。

近藤　恒雄君　十月中旬母堂逝去せらる。